

ぬらちるの

火影みみみ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある雪の日、一人の女性が命を落とす。

彼女が再び目を覚ますと、そこは見たこともない世界だった。

目次

ぬらちるの

「寒い……」

年明け早々大雪に見舞われ、ライフラインが止まるという不幸。仕方ないので近所のコンビニへ向かったものの、当然のごとく食料品は品切れ。

仕方なしに調味料と日用品を少しばかり購入して帰ることにした。しかし、寒い。とても寒い。

あたりを見回せば一面白・白・白の白一色。

ついでに言えば空も降る雪でかなり白い。

「こんなことになるなら、寒さに強いように生まれてくればよかったなあ」

なんて軽い冗談をつぶやきつつ、雪を掻きわけ歩みを進める。

しかし、思えばこれがフラグだったのかもしれない。

「ん？ なにこの」

音は？と続けようとして、頭上から強襲してきた物体に視界をふさがれ、そのまま彼女は地面へ叩きつけられる。

「!!?!?!」

一瞬の停止、からの混乱状態に陥る。

顔面に伝わるこの冷たさと今の天気、そして暗い視界にわずかに見える雪に何が起こったのかを理解した。

雪だ。今彼女は頭上にあつた積雪に押しつぶされているのだ。

彼女は急いで脱出しようとして試みたが、体が少しも動かない。想像以上の積雪が体の上につきもり、その重さで体が動かないのだ。

（いやだいやだいやだ止めこんなところで死にたくない、いやだれか助けて）

悲しみや後悔や絶望が彼女の心を支配する。

むやみやたらに体を動かそうと試み、無駄に体力を消費して、数時間、いやもしかしたら数分のことだったかもしれない。

（あ……、もう、だめかも）

精魂尽き、襲い来る眠気に抗えなくなり、その瞳を閉じる。

次に生まれるなら、こんな死に方はしたくないなと願いながら。

「あれ？」

突如差し込んだ光に瞼を開ける。

視界の先には気絶する前まではあつた積雪はどこかえ消え茶と緑が混じった大地が広がっていた。

先ほどまでに感じていた寒さもなく、体の感覚もいつものような状態に戻っていることに気が付く。

さっきのは夢？ そう思いながら体を起こす。

「……え？」

顔を上げた先にあるその光景は、彼女を驚愕させるのに十分すぎるものだった。

一面が見たことのない植物に溢れ、そのほかの生物もなく、広大な大地が広がっていた。

「え？ ええ？ ー(どこどこ)？」

立ち上がり、あたりを見回してみるものの、人影どころか動物や建築物さえ見当たらない。

私が死んで天国にでもいるのかと思ったがこの体を感じる空気や体温の感覚が、ここが現実だとはつきりと知覚させてくる。

それにこんな不気味な天国はいやだ。

「……」

彼女はとにかく誰かを探すことにした。

しかし歩めど歩めど何も見つからず、妙な植物が一面に生えているだけ。

数分、いや数時間以上歩き続けて落ち着きを取り戻しかけたころ。周りだけではなく自身の異常にも気が付いてしまった。

「なによ、これ……」

そうやって見つめるのは自身の腕。

色白で艶のあるまるで小学生のような小さな腕。

彼女は大学生のはずだ。あと一年すれば就職活動をして、卒論に追

われ、みんなと一緒に打ち上げパーティーをしたりしてお酒を飲んで  
は泥酔するような歳の女大生のはずだ。

だからまかり間違ってもこんな子供のような小さな手が彼女の手  
であるはずがないのだ。

「あは、ははは……、あたいの手つてこんな小さかったっけ？ ……ん  
？ あたい？今私、あたいつていった？」

彼女は首をかしげながらとりあえず言い直そうと試みる。

「なんであたいの、あたいのことあたいつて……、あれ？」

私、と言えない。

私と言おうとすればあたいと自動的に口が動いてしまう。

ゆっくり言っても逆に早口で言ってもダメ。

彼女の一人称はどうやらあたいの、で決定されているようだ。

「なにこれ、意味が分かんないですけど……」

急に縮んだ自身の体。なぜか変化した一人称。

自身の許容を大きく超える事態に直面し、頭が正常に働かない。  
なぜどうしてなにがどうなって、そんな言葉が脳内を駆け巡る。

ふと右をみれば少し遠くに浜辺があるのが見えた。

「……確かめなきゃ」

そう思い歩みを進める。

そんなに遠くではないはずなのに一步一步が重い。

まるで彼女の歩みを邪魔するように、まるでそこへ行ってはいけな  
いかのように足がゆっくりとしか動かない。

十分以上に時間をかけ、彼女はそこへたどり着く。

息をのんでゆっくりと水面へ顔をのぞかせる。

そこには、彼女の顔はなかった。

見覚えはあるもののそれは決して三次元で見たようなものではな  
く、そもそもが空想の産物であり現実世界に存在しているものではな  
かった。

「あはは、はは、はははは……まじで？」

そこには、チルノがいた。

悲しそうに顔をゆがませ、こちらを見つめる氷の妖精がそこにい

た。

唐突に彼女は理解した。彼女は転生したのだと。漫画やアニメであるような死後からの転生、そして私はチルノになったのだと理解した。

おそらく彼女はあの積雪で息を引きとり、転生してしまったのだ。だが問題はそれだけではなかった。

「きゃ!?!」

彼女の体に何かが触れ、驚いて立ち上がる。

「何何何よ!?!」

触れた部分へ視線を向ければそこにいたのは見たこともないような生物だった。

一見するとそれはサソリに近いが、ハサミも毒針もない不思議なそれはゆっくりと歩みを進め海へと帰っていく。

彼女はすこし怯えつつも脳内に沸いたある疑問がその後を追えと語りかけてきた。

その声に導かれるように彼女は海へと入る。

肩まで水面が迫ったところで私はいったん息を止め、しゃがむように頭を海水につけた。

そして恐る恐る目を開くと、そこにあったのは彼女にさらなる絶望を与える光景だった。

「ぶはっ……」

急いで顔を上げ、そのまま陸へと走る。

走って走って走って、海からだいぶん離れたところで彼女は膝をついた。

「ははは、こんなので、こんなのってないよ!?!」

天を仰ぎ、叫ぶ。

あの海にはさつききのサソリもどき以外にも生物がいた。

エビの尻尾みたいになってるものやクモのような脚で陸を歩きそうなのなど、似たり寄ったりではあるものの多くの生命がそこに蔓延っていた。

見たことのない生物ばかりだったが、逆にそれらをみたおかげで今

私がどこにいるのか確信してしまった。

見たことのない植物に、サソリのような生き物。

まるで進化の途中のようなそれらは、文字通り進化の途中だったのだ。

そう、つまりここは私が知る地球であるが、私がいた西暦2010年ではなく。

「ジュラ紀や白亜紀より前つてことはたぶん古生代のどれか、つてことは最低でも2億5000万年以上前なのかな……」

正しくはここは古生代のシルル紀、つまり現代から約4億4370万年前から約4億1600万年前となる。

けれどこの時の彼女にはそんなことは知る由もなく、ただ漠然と古代の地球であることしか認識できていなかった。

だがそれでも、彼女に絶望を与えるには十分だった。

「こんな場所にたった一人、しかもチルノに転生して、人類が出てくるのが何億年も先だなんて……」

明言されてはいないがチルノはじつは結構年上だったりする。その体を持つ彼女も相当長生きできるはずだ。しかし、いくら長生きできようが、それまで人の精神が持つかは保証できない。

百年ならまだ耐えられたかもしれない。千年でも希望はあった。

しかしそれらをはるか上回る億の壁。そんなどうしようもない年数に彼女は嘆き悲しむことしかできなかった。

『近年世界各地で発見されている日本語で書かれたと思われる謎の石板群ですが、炭素年代測定を行なった結果最古のもので六千万年以上前には既に存在していたことが確認されました。中には数億年前の



地層から発掘されたものも存在し、文明も科学もない時代になぜこの様な物が作られたのか学会では日々討論されているようですが、一向に答えが見えない状況です』

『こちら特別に公開された石板の一部を読み上げさせていただきます』

『あたいが生まれて何年経った？ 令和あと何年？』

『来る日も来る日も同じ日々もう待つのに飽きた』

『もう百年はすぎたと思う。まだまだ遠い』

『記す石もすくなくなつた。洞窟が石の図書館みたい』

『早く来ないかなへいせい』

『徐々にたいりくの形が変わってきた』

『昨日見たらペットが死んでた。いつから飼ってたんだっけ？』

『もうあたいの名前も思い出せない。あたいつて誰だっけ』

『ずっと誰とも話していない、寂しい』

『なんか最近氷をよく見る氷河期かな』

『あああああああああああああああああああああああああああああああ  
あ』

『嫌だ嫌だもう独りは嫌だ』

『あたいは誰!? なんでこんなところに一人ぼっちなの!!』

『死にたいけど死ねない。何をしてもこの体が死ぬことはない』

『マグマに落ちても、身をなげても、毒を食っても、気がつけば五体まんぞくで生きている。ここは地獄か』

『あ、恐竜さんだ』

『今日はステゴサウルスの背中に乗った』

『今日は美味しい木のみがあった』

『あたいの名前って何だっけ？』

『このもじってなんだっけ？』

『あたいたい、チルノ!!』



ぬらりひよんが止める声も聞かず、チルノは走り去っていった。

「おや、どうかされましたか?」

彼の背後から小さな子供サイズの妖怪、烏天狗がふわふわと飛びながら近づいてくる。

「いやの、チルノの奴がリクオと遊ぶって行って学校に行ったんじやが、あいつ学校の場所なんぞ知らぬだろうに」

「おや学校、ですか? 確か今は夏休みで閉まっているはずですが」

おかしいな、と烏天狗は首を傾げる。

「……確かそうだったの」

すっかり忘れていたぬらりひよんだったが。

これではリクオに会える筈がないが、まあチルノなら直ぐに帰って来るだろうと、そのまま気にせずに屋敷に戻っていった。